



Shin-Kobe 漢方薬だより

12月号 (Vol.5)

風邪と漢方 その1

いつのまにか秋を通り越して、すっかり冬になってしまいました。冬いといえば風邪をひきやすい時期ですが、日本人が風邪をひく回数は、1年間で平均2.3回というデータがあります。細菌やインフルエンザウイルス感染症ですと抗菌薬や抗インフルエンザウイルスが用いられます。その他のウイルスによる感染がいわゆる風邪になりますが、こちらは抗菌薬が効きませんので栄養や休養・睡眠を十分にとって免疫力を高めることが治療の大前提です。

風邪の諸症状には昔から漢方薬が用いられており、保険適応のものだけでも数十種類以上ありますが、なかでも葛根湯が最も有名な風邪薬になります。落語の演目に『葛根湯医者』といって、頭痛や腹痛をはじめ眼の痛みや付き添いの人まで、なんでもかんでも葛根湯を処方する医者のお話もありますね。

葛根湯は中国・後漢時代の末、2世紀末～3世紀初頭に張仲景(ちょう ちゅうけい)が著したとされる「傷寒論」(しょうかんろん)に記載されています。傷寒とは現在でいうインフルエンザウイルスのような急性に熱の出る感染症で、張仲景の一族の3分の2が10年以内に死んでしまい、うち7割は傷寒が原因だったためこの書を著したことが述べられています。

葛根湯の使用目標は、「感染した初期に、後頸部から背部にかけてこわばって凝りがあり、汗はせず、風に当たると寒気がするものに用いる」とあります。どのような風邪にも効くのではなく、風邪の引き初めで発熱や悪寒があつて首から背中がこわばるものによいこととなります。その他にも、熱がなくても首から背中中の緊張、つまり肩こりなどや、上半身で限局した化膿性炎症、発熱して悪寒あるいは頭痛しかつ下痢するものに使用することが述べられています。

こうしてみると頭痛や下痢、眼の炎症なども対象となり、落語の葛根湯医者はあながち的を外していないかもしれませんね。

副院長：岡田 直己



糖尿病・内分泌・漢方内科 新神戸おかだクリニック

電話：078-241-1350